東京都市大学共通教育部紀要　抜刷　2023 Vol.16

The Great Gatsby in Circulation：Commuter Trains, Automobiles, and The Midwest

循環する『グレート・ギャツビー』—通勤電車、自動車、そして中西部

秋山 義典

Journal of Liberal Arts and Sciences at Tokyo City University Vol.16, 2023

循環する『グレート・ギャツビー』
― 通勤電車、自動車、そして中西部

外国語共通教育センター　秋山 義典

1．動くモダニズムと『グレート・ギャツビー』

F・スコット・フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald）（1896-1940）『グレート・ギャツビー（*The Great Gatsby*）』（1925）をよみながら、気がつくことがある。それは、様々な場面でモノやひとが動いているところである。モノやひとが「動く」ことによって場面に微妙な転換が生まれ、徐々に物語が展開するように見える。その展開の「動き」にはモダニズムの空間と場所を移動する場面と関わっているのではないだろうか。それは距離や時間で分断された世界を空間的、地理的、技術的、地方的、都会的な視点から救済するような役割にも見える。「動く」ことによって、さまざまな孤立や個人を新たに結びつけることができるのではないだろうか。たとえば、広い国土の中で人々は距離や時間によって隔てられ切り離されて、身動きできないかもしれない。そこで、「動く」ことが世界を変えるかもしれない。それは分断され、孤立された空間を結びつけ、時間を短縮させることにつながる。またはバラバラになった感情の分散や人々の孤立や世界の分断に新たな解決の道を探るきっかけが生まれるのかもしれない。世界を取り巻く分断に「動き」をもたらすことで、前進の可能性が見えてくるかもしれない[1]。

1922年の春、中西部のまちからニューヨークにでてきたニック・キャラウェイ（Nick Carraway）は、この小説の主人公ジェイ・ギャツビー（Jay Gatsby）を印象深い人物と語ったうえで、4章で「ここには、追う者、追われる者、忙しい者、疲れた者しかいない（There are only the pursued, the pursuing, the busy and the tired）」（63）とつぶやいている。あることを「追う」ことやなにかに「追われる」人間の「動き」もある一方、みずから忙しく

つかれきって「動き」を失う人間もいる。すべてのひとが動いているわけではない。一時的に立ち止まって動かないものも、「動き」の可能性を秘めている。「動き」の可能性は、「動かない」ものや「動かない」ひとにも潜んでいる。

この「動き」とは時間と空間の座標軸に置き換えてみることもできる。第一次世界大戦は、ギャツビーとデイジーを引き離した。戦地ヨーロッパとアメリカの空間的な隔たりと戦争によって離れ離れになった時間的な隔たりがうまれた。このふたつの距離感が、ギャツビーとデイジーとの間の距離である。ギャツビーは、戦後デイジーとの断絶に悩み苦しむ。モダニズムとは、動きと運動の特徴である[1]。したがって、その距離を縮めることで、こうした切り離されたギャツビーの苦悩に答えを出すことができるのかもしれない。かれを苦しめる断絶と孤立はかれが戦後に築いた巨万の富のおかげで、その一部が克服されて、自己を回復できたといえるかもしれない。しかし、ギャツビーはそれ以上に第一次世界大戦で失われた時間でさえも、時計の針を逆にもどす「動き」を思い描く。ニックに仲介役に動いてもらえれば、大邸宅に移り住んだ自分が再び、デイジーの気持ちを取り戻せる期待を高める。動きを逆向きに変えれば、5年間という時間的な隔たりを埋めてくれるだろう。その確信は、ロマンティックでさえある。

このような「動き」の視点から、『グレート・ギャツビー』を見てみると、移動が重要な意味をもつ点がはっきりする。この点は、竹内康浩による論文『交通信号としてのギャツビーのグリーンライト』は作品に登場する数々の交通機関がとりあげられる。車、タクシー、ボート、ヨット、電車、水上飛行機など通常の移動のための交通機関のみならず、プールに浮かんだマットレスなどの移動手段、ジョーダン・ベイカーのゴルフボールなども「動き」をめぐる考察の対象になる。こうした「動き」には、水平方向および前方への動きが特徴的である。たとえば、米国の車社会が本格化して、1918年に世界初の三色電気信号機が、ニューヨーク五番街に設置されて、多くの車の「動き」に交通整理が行われた。当時設置されたばかりの交差点の「グリーンライト」が赤にかわると、人物たちや乗り物の移動が停止する。そのとき、これまで、前進している「動き」に変化があらわれ、移動の運動に、制限がかけられていく。やがて、移動体は、とまってみえる。本来、動き続ける主

体が、その「動き」を継続しないとき、なにか変化が生まれる。　この「動き」の変化と物語の展開に関連する場面も考えられる。たとえば登場人物の「動き」が、事故発生の原因につながり、犠牲者を破壊的な結末につながることにもなるだろう[2]。

「動き」を継続するには、「循環」する意味も生まれるだろう。このようなモビリティの動きの視点からも自動車を含めた『グレート・ギャツビー』における移動媒体の動きには、単なる場所の移動だけに留まるものではなく、そこには、象徴的なものが秘められていると思われる。他の移動媒介との比較のなかで、動きという視点から鉄道を見るのも有益であると思われる。

フランスから帰ったギャツビーが、手元に残った軍の俸給をつかってルイヴィルにむかったとき、ギャツビーをその町に向わせたのは、デイジーへ思いが強く残っていたからである。それと同時にこの土地に鉄道をつかって移動している。ルイヴィルの町中を市街電車が走る。この電車の乗客が、デイジーの知り合いかもしれないと、ギャツビーは想像をめぐらす。この場面で、電車にゆられながら、彼女を回想するギャツビーがいる。こういう回想に「鉄道」が関係している。歴史的に、鉄道は産業革命の象徴であり、19 世紀の最も重要な変革力の 1 つであった。第一次世界大戦以後のモダニズム作家たちが、この時代の「動き」がもたらす変化に特に敏感に反応した。その変化を代表するものとして、鉄道は蒸気船や馬車に代わって多くのものや人々を遠くに、できる限り速い速度で運ぶことが可能になった。鉄道は米国社会を大きく変えたわけだが、鉄道は都市生活者にとっても重要な役割を果たすようになった。『グレート・ギャツビー』のなかでも、大きな意味を持っている。加えて、この小説のなかには、移動媒体として、鉄道のみならず、自動車が走る場面も数多く、循環する動きを象徴している。モータリゼーションが始まる時期でもあり、本論でも鉄道と同様に注目される「動く」対象である[3]。

2. クイーンズボロー橋を走る自動車のマンハッタン

『グレート・ギャツビー』の鉄道とはひとつは、中西部と東部、もうひとつは、都市と郊外を結ぶ。空間と時間で分断された町や人々をつなぎ合わせるネットワークの循環である。たとえば、この物語を都市小説と見るならば、ニューヨークの摩天楼、多くのタクシー、地下世界の巨大な駅、プラットフォームの売店、ロングアイランドとニューヨークの間のトンネルなど、あるいはロングアイランド郊外とニューヨークが通勤電車で結ばれるが、都市と鉄道の関係が『グレート・ギャツビー』の中で浮上する。『グレート・ギャツビー』で利用されたモダニズム的な象徴とロングアイランドの間をつなぐ鉄道が浮かびあがるのかもしれない。それはつながるという点で、電話の存在も注目される。ギャツビーのシカゴの仲間からの長距離電話の交換や第1章ではデイジーとニックの会話から技術開発によるコミュニケーションが循環しているのが推察される。受話器をもった人物が電話というメディアを利用するのも、孤立と断絶を克服する契機になるが、ニックにとって、それは都市の中の鉄道線路であり、バラバラになった人々を乗車駅と目的地までつなぐ特別な役割でもある。

通勤電車が結ぶロングアイランドとニューヨーク[4]

ギャツビーとニックが暮らすウェストエッグからニューヨークに向かう町の様子はどうだろうか。第4章では、ニック・キャラウェイがロングアイランドからマンハッタン島のなかに入ろうとしている。ギャツビーは「ウエス

トエッグ」からクイーンズボロー橋（the Queensboro Bridge）を渡ろうとしている。このようにして郊外から都心にむかう方向からみると、ロングアイランドは単なる都会の街並みではない。橋の高所からマンハッタンの高層ビルが視界に展開する。この視点は、ニューヨーク全体を映し出している。橋の下には、ハドソン川がながれる。その川の向こう側にそびえ立つニューヨークの光景は、目にした人間だけがこの町がもたらす衝撃と興奮をつたえることができる。1920年代のニューヨークを象徴する光景は、現在ではよくみられる高層建物であり、代表的な都市のイメージにしかみえない。ニックが走り抜ける車のなかから、この光景を背景に、霊柩車とすれ違う。橋のうえで死者と一瞬すれちがう。ギャツビーの運命を予言するかのようである。かれの車は、クイーンズボロー橋のうえを走り抜ける。この小説の最後でギャツビーの遺体は霊柩車に載せられる。

The city seen from the Queensboro Bridge is always the city seen for the first time, in its first wild promise of all the mystery and the beauty in the world.（55）

クイーンズボロー橋から見る街は、何度見ても初めて見る街であり、世界のあらゆる謎と美しさを秘めた最初にみるような興奮をわきおこす。

たくさんの高い建物が狭い空間に立ち並ぶ光景をクイーンズボロー橋からみるとき、ニックはいままでに感じたことのないおどろきや衝撃を抑えることができない。クイーンズボロー橋は1909年3月開通した。アメリカの中西部にみられるなだらかな平原には、建物が立ち並ぶようすは記憶にあったにしても、圧倒的に輝くような超高層ビル群がいくつも立ち並ぶその空間は斬新だった。その巨大な都市にかれ自身が飲みこまれていく。これは大都市ならではの斬新な感覚である。こんな経験は、はじめてだった。ニックは、大平原のつづく原野ばかりみていた。このニューヨーク独自の感覚をさらにニックはこんなふうに言いあらわす。

“Anything can happen now that we've slid over this bridge," I thought; “anything at all. . . ." （55）

「この橋を渡ってしまった以上、何が起こっても不思議ではない」と私は思った。

大都会とは無縁な人生をおくってきたニックは中西部から荒野をとおってロングアイランドに移り住んだ。その土地は、ニューヨーク州南東部に位置する、大西洋に浮かぶ島である。ロングアイランドの郊外から、高層建物がひしめき合うようにたちならんでいるのがみえたとき、その光景は衝撃的だったにちがいない。「この橋を渡る」のは、かれにとって特別だったはずである。中西部から移動してきたニックが第一次世界大戦を契機に世界金融市場の中心がニューヨークに移り、この土地も「狂乱の20年代」をむかえている。製造業は活気をとりもどして、この地には高層の建物がぞくぞくと建設された。ニックは証券会社で働きはじめた1920年代前半は、1929年の世界大恐慌が発生するまでに時間がある。このような大都市のきらびやかな姿のなかに金融不安の影が映し出される。

Over the great bridge, with the sunlight through the girders making a constant flicker upon the moving cars, with the city rising up across the river in white heaps and sugar lumps all built with a wish out of non-olfactory money.（55）

大きな橋を渡り、橋げたから差し込む太陽の光が動く車に絶え間なく揺らめきを与え、川の向こうには白い山と砂糖の塊でできた街がそびえ立っているが、そのすべてが嗅覚に訴えることのないお金から願いを込めて作られている。

1920年代のニューヨーク、マンハッタン[5]

橋をこえるには、車で走り抜ける必要がある。この「白い山と砂糖の塊でできた街」がそびえたつ様子を味わうには、クイーンズボロー橋を走らないといけない。ギャツビーは、プロビティ信託会社につとめるニックが、徐々に感じ取っていた金融バブルによってつくられたみせかけの空気を一気に払いのけるかのように、車のスピードを上げて橋をかけぬける。その直後、そのギャツビーの操るこの黄色の車は、白バイに追いかけられて、捕まえられる。車のアクセルを踏み続けて車のスピードをあげようとしたからだ。ところが、かれは白バイの警官に紙を一枚みせて無罪放免になった。スピード違反などどうでもいい。ここでも、風を切るようなスピードで、「動き」をとめることなく、警官の尋問から解放されると、なにも起こらなかったかのように、ギャツビーの車が走り抜ける。それは金持ちの社会的な象徴を見せびらかしているのかもしれない。速度を上げた車がクィーンボロ橋を走り抜けるときに橋のうえから、見下ろす壮大な光景の中に車は「動き」をとめることなく、大都市の摩天楼のなかに消えていく。

車が走る場面が印象的なのは、20世紀初頭が、モータリゼーション時代の始まりだったからである。1926年のフィッツジェラルド「金持ちの御曹司」では蓄電池で走る自動車が登場し、自動車テクノロジーの輝かしい時代の到来が暗示される。勇敢な女性は電気自動車にのって、五番街を走り抜けている。車の台数が増加すると、トラブルも目立つようになる。『グレート・ギャツビー』には下手な運転、交通違反、事故、事故寸前の例が数多く登場する。ギャツビーの最初のパーティの後、酔っぱらった客が自分の車を溝に突っ込ませて事故を起こす。批評家サラ・チャーチウェルはニューヨークのグリーンライトを無視する運転者を「不注意な人」と呼んだが、本論ではこういう車利用者をその著書の題名のように *Careless People* と呼ぶのにふさわしい[6]。プロゴルファーのジョーダン・ベイカーは、道路工事の集団を礫きそうになり、「フェンダーが一人の男のコートのボタンを弾いた」と思うくらいギリギリ近くを車で走り抜ける。彼女は「腐った運転手」という不名誉な称号を受けることになる。乱暴なのは、運転だけではない。彼女はゴルフボールの置かれた悪い芝生のライも平気で置き換えてプレイを続ける。車の運転もいい加減であるのと同様にルールのモラルの意識も高くない。トムはサンタバーバラからロサンゼルスに行く途中で、ワゴン車に衝突して、

同乗の女性は腕の骨を折るような自動車事故を起こしている。最後にギャツビーの車でひき殺されるマートルは時速60マイルで走る車の犠牲になった。デイジーが運転するギャツビーの車は、スピードをひかえることなく、走り抜けていった。この無謀な運転の車に跳ね飛ばされて、マートルの命を奪ったことから、「死の自動車」などと呼ばれたりする。スピードを控えて安全運転を心がけようとはしない無責任な登場人物はほかにもいる。かれらは、ジョーダン・ベイカーであり、トムであり、デイジーたちである。デイジーのような不注意な運転手がいなければ、このマートルの悲劇が引き起こされなかったであろう。同時に、自動車のテクノロジーが改良されて、時代は低速の移動から加速の移動へのときを迎えていたのも、否定できない。人々は、車のスピードを体験して、その快適さに魅了され始めた。自動車事故の背景にはスピードという新しい感性の変革も、生まれた。

３．ロングアイランド鉄道のトンネル建設と電気機関車

『グレート・ギャツビー』では、登場人物たちが、ニューヨークに移動する場合、２つの方法がある。この移動のひとつは、自動車をつかった道路での移動がある。たとえば、ギャツビーは、ニックをのせて、ロングアイランドからニューヨークへと車を走らせる。その一方で、ロングアイランドからニューヨークへと行き来する鉄道が走る。ニックは、鉄道をつかってニューヨークの仕事場に向かっている。

夏の日曜日の午後、穏やかな天気の一日であった。その日、ニックは夜10時頃までパーティで時間をすごした。そのパーティは、ニューヨークのプラザホテルにトム、デイジー、プロゴルファーのジョーダン・ベイカー、そしてニックが集まった。アルコールをのみすぎて、二日酔いのまま、ニックは、つぎの朝を迎えた。かれは自分でもよくわからないまま、ホテルを出てふらつきながら、早朝のニューヨークを歩く。イーストエッグに帰宅するために、ペンシルバニア駅にむかった。ニックは、知らず知らずのうちに横たわっていた。そこはペンシルバニア駅の地下ホームだった。

Then I was lying half asleep in the cold lower level of the Pennsylvania Station,

staring at the morning "Tribune" and waiting for the four o'clock train.（32）

その後、私はペンシルバニア駅の寒い下層階で半分眠りながら、朝の「トリビューン」を見つめ、午前４時の列車を待っていた。

ニックは、気が付くと、夏の日は次の日の明け方になった。暗い地下にひそんでいるもうひとつのニューヨークの駅がここに暗示される。「in the cold lower level」といわれるようにペンシルバニア駅は地階につくられている。地下につくられたプラットフォームは、冷たい空気につつまれる。夏の日の月曜の朝であるが、冷やりとする。ロングアイランドから鉄道に乗ったニックはこの古い歴史あるペンシルバニア駅をつかって通勤する。早朝のペンシルバニア駅は、日差しがまぶしい夏の日であっても、涼しい。さらに早朝の寒々しい空気につつまれている。

ニューヨークの空気は冷たく感じられたと描かれている一方で、別の日、ニックが乗った電車には、トンネルを抜けると暑い夏の熱が車内に入り込んだ。

The next day was broiling, almost the last, certainly the warmest, of the summer. As my train emerged from the tunnel into sunlight, only the hot whistles of the National Biscuit Company broke the simmering hush at noon. The straw seats of the car hovered on the shirtwaist, and then, as her newspaper dampened under her fingers, lapsed despairingly into deep heat with a desolate cry. Her pocket-book slapped to the floor.

"Oh, my!" she gasped.（91）

次の日は、この夏最後の、そして最も暖かな日であった。私の列車がトンネルから陽光の中に出てくると、ナショナル・ビスケット社の熱い汽笛だけが、正午の煮えたぎるような静けさを破った。車内の藁のシートがシャツの裾にかかり、彼女の新聞が指の下で湿ると、絶望的な叫び声とともに深い熱の中に包まれた。彼女のハンドバッグが床に叩きつけられた。

「あら、いけない」 彼女は息を呑んだ。

列車はロングアイランドからニックを乗せてマンハッタンに向かう。この日もニューヨークの夏の一日である。「トンネル」を抜けると隣の女性が汗を流している。トンネルから出た列車に太陽の光が降りそそぐ。いかにも、夏の暑い空気が漂っているのが感じられる。ただし、「トンネル」をこえたこちら側の暑さが、女性の白いシャツにながれる汗の動きからも伝わる。特にこの7章から、小説の中の天候が変化する。特に夏の気温が急上昇している。同時に郊外から大都市の中心部に接近するその距離も徐々に短くなる。「the simmering hush」という「煮えたぎる静けさ」や夏の暑さが、特に強調されている。地下を走る鉄道は、トンネル内を走行する。しかし、トンネルを出ると、車内に日差しが差し込む。差し込んだ日差しが、再び夏の空気を運んできた。車両の空間のなかで「トンネル」内の冷たい空気と「深い熱(deep heat)」がまざりあっている。

『グレート・ギャツビー』のなかでは、ニューヨークの実在の場所と架空の場所が混在しているが、このトンネルはイースト川の下に掘られたイースト川トンネルであると考えられる[7]。1920年代から30年代にかけて、ロングアイランドの人口は倍に増えた。そのために鉄道輸送の需要が増加した。このイースト川トンネルが完成したあとに、はじめて、ロングアイランド鉄道が、ペンシルバニア駅に接続する。もともとはハドソン川を渡る鉄道橋を建設する予定だったが、代替案であったこの川の下にトンネルを掘ることになった。そもそもロングアイランド鉄道(LIRR)とは、イースト川があったために、その先のマンハッタンに接続できなかった。そのため、川の手前で終点になる。この鉄道の乗客はフェリーに乗って、川をこえてから、マンハッタンに乗り換えなければならなかった。そこでペンシルベニア鉄道(PRR)がトンネル建設を始めた。このトンネル建設は巨大な土木事業といえるであろう。この路線の利用客にとって、イースト川のトンネル建設は大きな意味があったと思われる。フィッツジェラルドは、この点を意識しながら、トンネル内を走る新しい鉄道の開通に触れずにはいられなかったと思われる。この建設が始まったのが、1904年から始まり、1910年にペンシルバニア駅まで開通した。ハドソン川のトンネルでは、蒸気機関車では空気がけむりで汚染されてしまう。それを回避するために、蒸気機関車のかわりに電

気機関車が走ることになった。このようにロングアイランドとペンシルバニア駅に直結するトンネルが建設されて、蒸気機関車の時代が終わり、その代わりに新しい電気をつかった鉄道が走ることになった。『グレート・ギャツビー』のなかに電気機関車が登場する。このような鉄道車両の新時代を背景している点がこの小説の斬新な点である[7]。

４．鉄道のロングアイランド

『グレート・ギャツビー』では電車は不倫のきっかけになっている。というのも、ウィルソンの妻マートルとデイジーの夫トムが出会い、知り合うきっかけがうまれたのが電車のなかだったからである。それはふたりが電車の座席に腰かけたときだった。偶然に空席だった車内の椅子に座ったとき、はじめてマートルはトムに出会った。その車内に座ったことから、見知らぬ男女が愛しあうようになる。これは鉄道のもたらす意外な側面のひとつである。

マートルは、トムとどのようにしてつきあうようになったか。マートルが妹に逢いにニューヨークに行くときだった。

"It was on the two little seats facing each other that are always the last ones left on the train. I was going up to New York to see my sister and spend the night. He had on a dress suit and patent leather shoes and I couldn't keep my eyes off him but every time he looked at me I had to pretend to be looking at the advertisement over his head. When we came into the station he was next to me and his white shirt-front pressed against my arm—and so I told him I'd have to call a policeman, but he knew I lied. I was so excited that when I got into a taxi with him I didn't hardly know I wasn't getting into a subway train. All I kept thinking about, over and over, was 'You can't live forever, you can't live forever.' "（31）

それは、電車の中でいつも最後に残る、向かい合った２つの小さな席でした。私は妹に会うためにニューヨークに行き、一晩過ごすことになっていました。彼はドレススーツを着て、エナメルの靴を履いていました。私は彼から目が離せませんでしたが、彼が私を見るたびに、彼の頭上の広告を見て

いるふりをしなければなりませんでした。駅に着いたとき、彼は私の隣にいて、彼の白いシャツの前身が私の腕に押し付けられたので、私は彼に「警察官を呼ぶわ」と言ったのですが、彼は私が嘘をついていることを知っていました。興奮していた私は、彼と一緒にタクシーに乗ったとき、自分が地下鉄に乗っていないことに気づかなかった。何度も何度も、『永遠に生きられない、永遠に生きられない』ということばかり考えていました。

電車の座席から、男女の出会いが生まれている。加えて、マートルがトムとニューヨークでデートを楽しむ場面では、電車が示す特徴があらわれる。たとえば、それはロングアイランドの郊外住宅地の出現に関係する。彼女はトムとは同じ車両には乗り合わせないように注意を怠らない。トムがマートル・ウィルソンに「次の電車に乗ってくれ」という。この言いかたも、二人の不倫関係から電車の利用が暗示されていることがわかる。こうした日常生活のなかの電車の役割を称して、小池滋は「ソフト・レイルウェイ」と呼んで、鉄道の新しい視点を強調した[8]。このような出来事は、ロバート・デニーロとメリル・ストリープ主演『恋に落ちて（Falling in Love）』（1984）などの20世紀後半のハリウッド映画などでも注目される、都会ならではの大人のラブ・ストーリーによく似ている。都市と近郊をつなぐ通勤電車であるからこそ、特徴的な出来事でもある。鉄道によって中央駅と郊外がむすばれて、この路線を利用する人々のドラマがはじまることになる。あたらしい人間関係が通勤電車によってうまれるというのが、『グレート・ギャツビー』の都市小説らしいおもしろさである。

トムがマートルとニックとともにニューヨークに向かうときに、かれらは鉄道で行く。ところがトムは灰の原で鉄道を降りると言い出す。鉄道を降りてどこに向かったのか。ジョージ・ウィルソンの自動車修理工場にはいっていった。トムはニックにこの灰の山をよく見るように話す。灰の原であるうらぶれた土地にこの工場があり、ジョージ・ウィルソンがいる。ウィルソンは、トムとは対照的に幽霊のような影のうすい存在だ。かれは、結婚していて、妻がいた。彼女はこの小説の中で「ウィルソンの妻」と呼ばれる。マートル・ウィルソンである。夫のほうを振り向きもしないマートルであるが、彼女がトムとなにか関係があるとニックは気がつく。ニックは、トムにはデ

イジー以外に別の女がいると聞いていた。その女とは、マートルのことだろうと推測した。

トムとマートルは、不倫関係である点を確認したうえで、（不倫の）男女がどのような交通手段を利用するのか、という問題に注目する批評家がいる。不倫の男女がわざわざ電車に乗ることを選択するのは、なにか意味があると原武史は注目する。車を利用する場合と鉄道を使う場合では本質的な違いが浮き彫りになるという。電車は「プライベートな空間を二人に提供しない」からである。加えて「何の変哲もない郊外電車の車内風景」とは「第三者との関係で自己を見定めるようにしいられ」る[9]。　同じ車両に乗れば、ふたりの関係が第三者から見破れる可能性は否定できない。電車はトムとニックは同じ車両に乗るが、マートルは同じ電車に乗るものの、車両は別にしている。彼女は周囲の視線を十分に意識するようにしている。鉄道の中では、自分の行動には慎重なのである。トムは、次の電車の時間をわかっている。時刻表で電車の出発時刻をしっかりと頭に入れて行動している。マートルが同じ電車に乗っているのを、イーストエッグの住人には知られたくないからである。トムは、すでにデイジー以外の女性とレストランで食事をしているのを友人に目撃されていて、他者の視線には注意深い。こうした注意深い配慮をトムがおこなっているが、マートルとの関係が、世間で広まらないようにトムは、慎重に行動している。トムはマートルにいつものように「駅の下のホームの新聞売店のところで待っているから」といって彼女を誘う。この「新聞売店」が駅にあるというのも、鉄道と『グレート・ギャツビー』の登場人物を暴露する意味をもつだろう。新聞売店には、有名人のスキャンダルを報道する雑誌も売られているのである。

こういうふたりが車を利用して、不倫関係をすすめるのはどうだろうか。鉄道には、自動車とはちがう独特な空間の特徴がある。一方、車には、「密閉された空間」が提供されることによって、そこには「二人の気持ちを完全にひとつにする」特徴をもった空間が生まれる可能性が高い。しかし、それは、同時に、第三者の視点から見破れる可能性が高い。したがって彼らがよく行う車を運転してマンハッタンにでかけるのは、安全ではない。用心深いトムは、そこで考えた。電車に乗るほうが、自分にはリスクが少ないと冷静に判断する。

６．「鉄道王」になりたかったギャツビー

この小説の最後で、ギャツビーの父親、ヘンリー・C・ギャッツが亡くなった息子を思い出す場面で、「息子が生きていれば、偉大な人物になっていただろう。ジェームズ・J・ヒルのような男に。かれは国の建設に貢献していただろう」と語っている。ジェームズ・J・ヒル（James J. Hill）（1838-1916）とはミネソタ州に移住したカナダ人であるが 19 世紀後半アメリカの鉄道を築き上げた鉄道王として知られる。国家的な社会功績という点で、鉄道は、遠く離れた東西の人々を結びつけて、アメリカに活力を与えたとみられる。それは少なからず空間と時間を結びつける重要な社会基盤だった。しかし、この「鉄道王」をギャツビーの人物像に重ねて肯定的に取り上げるこの場面には、『グレート・ギャツビー』の特徴が潜んでいる。ギャツビーの父親は息子が西部鉄道事業の主役になってほしかったと語った。その父親の話を聞いて、ニックは "That's true," I said, uncomfortably（ええ、まったく、居心地が悪そうに）と答える。この uncomfortably というは、この父親がこの後、ベッドで寝入ったとあるので、その姿に「居心地の悪さ」と示していると理解できるが、「鉄道王」と聞くと、「不快なきもち」で「そうでしょうね」とニックが反応したともとれる。というのも、アメリカの「鉄道王」には、いつもポジティブにイメージされるわけではないからである。歴史を遡れば、19 世紀後半、アメリカにとって鉄道とは国家形成を象徴したといっても過言ではない。アメリカ国民は、フロンティアという無限のロマンスを求めていたから、西へのあこがれがあり、西に未来が開かれていると信じていた。太平洋は、米国大陸にとって鉄道会社の名前に、「パシフィック」という名称をよく見るのはそのためである。1869 年には最初の大陸横断鉄道が完成したが、それ以降、鉄道建設とはネイティブ・アメリカンへの圧政や労働者の虐待、政治家と事業者の癒着など暴力と札束が飛び交う汚辱の歴史でもあった。巨大組織に膨れ上がった鉄道事業に民衆の反発が生まれるのも当然だった。ディー・ブラウンの大陸横断鉄道物語『聞け、あの寂しい汽笛の音を』によれば、ミネソタの鉄道王ジェイムズ・ヒルが「彼の非情さはみずから崇拝するナポレオンやチンギス・ハーンにも匹敵するものになっていく」と書か

れている。西部劇映画『大列車強盗（The Great Train Robbery）』（1903）のアンチ・ヒーローが人々に賞賛される理由があった。この時代の鉄道王とは大富豪であり、同時に民衆の命を奪い、冷酷残忍な経営者であり、民衆の敵でもあった[10]。

オックスフォード版のテキスト注釈では「ヒルは西部の拡張に携わる新しい鉄道産業で財を成し、19 世紀末には北西部の鉄道をかれが実質的に支配していた」とだけ書かれている。「鉄道王」は、『グレート・ギャツビー』では社会批判の対象というより、むしろ肯定的にとらえられている。その「鉄道王」の社会的テーマはそれ以前に、セオドア・ドライサー、フランク・ノリスやスティーブン・クレインの小説の中の鉄道事業者は、社会批判の対象であった。しかし、フィッツジェラルドの見方は、単なる社会批判の対象になるのとは少し異なっている。その理由は、20 世紀を数十年過ぎて、鉄道が日常生活のなかの定番化したことの表れであり、この小説が鉄道王に対するマックレイキング（社会不正暴露）を主題にしているわけではない。フィッツジェラルドは、鉄道会社の社会告発というテーマにむかうことはない。鉄道批判の主題ではなく、都市の視点から、鉄道の現代的な役割を強調している。その点でこの小説は、モダニズム小説に近いともいえるのではないだろうか。

フィリップ・フィッシャーは、小説の中の鉄道とは、モデル化された水平方向の前進であり、それは現実主義的なパターンにつながるといっている[11]。この鉄道の動きをホリゾンタル（水平移動）と呼んでみるとすれば、このようなニューヨークの都会とロングアイランドを結ぶ電車の水平関係というべき線路が地下鉄のように終点のペンシルバニア駅につながっている。1906 年当時のトンネル建設などで線路は、物理的な多大な労力がかけられている。同時に水平的な象徴とみられる。一方、車はどうかというと、車も水平移動しているが、地下を走らない。バズ・ラーマン監督の映画で描かれているように「ブルックリン橋」あるいは「クイーンズボロー」の上空を車は疾走する。車窓には「白い山と砂糖の塊でできた」ニューヨークの高層建物がそびえたつ。自動車の視点は、高い位置に置かれている。高い視点から見える都市のすがたは、華やかで、享楽的で空想的な未来への時代の空気が漂う。自動車を上方の空間を走る自車窓の視点は高い位置に置かれる。車と鉄

道は、その上下関係から、その対称性を強調することも可能であろう。移動手段のちがいが、上からの視点なのか、下からのものなのか、考えることもできるかもしれない。

『グレート・ギャツビー』を語る上で、この小説の鉄道の循環に焦点を当ててみると、ウェストエッグとニューヨークの間に広がる近代的な人工産業の荒れ地、悪名高い「灰の原」が印象的だ。それは、T·S・エリオットの『荒地』における不毛なイメージの枠組みを連想させる[12]。この「灰の原」は鉄道の線路と車の車道が交錯しあう象徴的な地点でもある。「ウェストエッグとニューヨークの中間地点で、自動車道路は急いで鉄道に合流し、荒涼とした土地から遠ざかるよう4分の1マイルほど鉄道の横を走る」と書かれている。ヴォルフガング・シベルブシュは、「鉄道は町の中心部ばかりでなく、郊外と荒れた外郭地区の性格付けをした」と指摘し、鉄道は「都市の不動産市場に最大の影響を与える要素になった」という[13]。2012年公開のバズ・ラーマン監督『グレート・ギャツビー』では灰の原駅で電車が停車するが、ひとが住めないような殺伐とした異様な場所である。車の修理工場を営業するウィルソンでもあっても、この荒れた土地から早く逃げ出したいのがよくわかる。

ギャツビーがこの小説の中で車を運転している場面は、印象的であるが、フランスから帰還したかれが軍の俸給のほとんど使って鉄道でルイヴィルに向かった場面がある。その点は読者には、忘れられているかもしれない。確実に出会う見込みなどないにもかかわらず、デイジーの姿を探し求めるギャツビーの姿はロマンティックに見えるが、ルイヴィルの街中を移動するとき、ギャツビーは車には乗らない。ルイヴィル鉄道に乗っている。ギャツビーが乗車した列車というわけでないが、ルイヴィル市内を走る高架電車は、当時「デイジー・ライン」と呼ばれていた。もしかすると、実在の場所と小説の人物の名前を重ねあわせていると考えることができる。ルイヴィル市内を客車の窓から眺めている。かれはデイジーを思い出しながら、客車に揺られている。きっとこの乗客のだれかがデイジーの姿を見たはずだと強く確信する。彼女への忘れられない思いが鉄道に乗った彼の脳裏を行き来する。そして、中西部のこのルイヴィル鉄道のイメージが、やがて、アメリカ東部を走る鉄道のすがたを思い起こさせる。さらに小説の後半の東部から再

び、中西部に電車で帰るニックにつながっているように思える。この鉄道のイメージは、『グレート・ギャツビー』の西部と東部を結びつける象徴でもある。そして、物語自体が、汽車の線路でつながれているような循環の動きも想像させるのである。

８．アメリカを循環する鉄道と登場人物

ウォルフガング・シベルブシュは、アメリカ人が鉄道のなかでヨーロッパの乗客とは対照的にいかに活動的なのか指摘している。ミシェル・シュヴァリエのことばを借りれば、米国人は今着いたばかりの場所から、かれを運んでいく次の蒸気船に乗って出発する準備を常にしているという。「転居への情熱」がアメリカ人の行動力に象徴的につながっていると見ている。米国人は「動くことに情熱を燃やし、同じ場所にとどまることができない」のである。むかしの蒸気船に乗ったアメリカ人がじっとしていられなかったように、特に、都市の住人には落ち着いていられない性質が顕著なのかもしれない[14]。

鉄道が循環しているように、夫ウィルソンと妻マートルの関係も鉄道を通して展開する。夫は妻が電車を利用して、別の男に出会うチャンスに恵まれ、自分がだまされているとは気が付つくことができない。夫ウィルソンは鉄道に乗る習慣がないからである。日常化した路線は、同じ駅を乗り降りする不特定多数の乗客が利用する。電車にはロングアイランドの知り合いが乗客として乗り合わせている可能性がある。3章でニックがギャツビー邸に集まった客をみたとき、その客の顔ぶれをおもいだして「たしか通勤の電車でみたようだと思う顔もなくはなかった」と言っている。ニックが自分の記憶に自信があると自慢しているわけではなく、だれしも毎日の通勤で日常的に乗り合わせた群衆と顔見知りなのであろう。このように 都市の通勤電車とは独特な意味が潜んでいる。時刻表に従って運行される公共交通機関であるという性質上、見知らぬ人々でありながら、鉄道が、同時に人々を知らず知らずのうちに車両の狭い空間に物理的に束ねる空間的な要素をそなえている点も注目される。鉄道の不可思議なところは、不特定多数の他人の無意識の動きに時刻表的な規則性を示しつつ、無名性の人々でありながらも、無名

な他者と他者をむすびつける可能性を微妙に示唆する。電車の循環は、ときに見知らぬ人々と人々を結びつける可能性もある。鉄道建設により、駅が作られて、駅の周辺には郊外住宅地が作られる。同時に、鉄道がつくりあげる人々が循環する動きには、知らず知らずのうちに、うわさやゴシップが形成される可能性も秘めている。

同じ路線を同じ人々が利用する電車には、倫理観のレベルが一定に保たれるという面もある。ニックの言葉やトムの用心深さを思い出すと、不倫を社会的に寄せ付けない高いモラルハザードがあるのかもしれない。

鉄道の日常化は、2つの究極の技術的メタファーであり、フィッツジェラルドは、ニックの属するいわゆる中流階級の生活の規則性を描くために用いている。この小説の登場人物たちが、この新しいテクノロジーにいかに対応するのかは、小説の最後のほうで、ニックが自分の小さな車を「食料品店」に売って、鉄道に乗って帰る様子が描写されることから推測できるだろう。終盤、ニックが人工的な緑の芝生のロングアイランドの地から素朴な自然あふれる中西部に戻っていくが、このような中西部に車では帰ることはできない。車で行くにはあまり遠いのである。しかし、鉄道には解決策が示されている。近隣までは車で移動することはできる。ニューヨークのプラザホテルには移動可能である。しかし、ミネソタ州までは鉄道を利用しなければならない。当時における人間とテクノロジーの相互作用に対する作者自身の鉄道への信頼を示している。レオ・マークス『楽園と機械文明』(1964)によれば、たとえば、ギャツビーが「サーカスのワゴン」と呼ぶ自動車が登場するが、これはマークスが述べているように、ギャツビーが目指している人生の質を要約したものであり、小説の後半では「凶器であり、ギャツビーを破滅させる道具」として機能する[15]。ギャツビーもニックも同じ中西部出身であるがゆえに、ニューヨークに向かう途中に、『グレート・ギャツビー』のニックやギャツビーという中西部人は、いまこそ自分が来た道をたどって、緑の田園に戻るべきであると、作者は主張している。人工的なアメリカ東部の緑のロングアイランドを対比させながら、緑の田園に戻るべきであるならば、「それが僕の中西部だった」とニックはつぶやく。マークスは指摘していないが、アメリカ東部の浮かれすぎた別世界から逃げ出すためにニックに救いの手を差し伸べてくれて、ニックに脱出手段を提出してくれるのが、中西

部につながる鉄道ではなかったかと思われる[15]。

One of my most vivid memories is of coming back West from prep school and later from college at Christmas time. Those who went farther than Chicago would gather in the old dim Union Station at six 0'clock of a December evening, with a few Chicago friends, already caught up into their own holiday gayeties, to bid them a hasty good-by. I remember the fur coats of the girls returning from Miss This-or-That's and the chatter of frozen breath and the hands waving overhead as we caught sight of old acquaintances, and the matchings of invitation: "Are you going to the Ordways? The Herseys? The Schultzes?' And the long green tickets clasped tight in our gloved hands. And、last the murky yellow cars of the Chicago Milwaukee and St. Paul Railroad looking cheerful as Christmas itself on the tracks beside the gate.

私の最も鮮明な記憶のひとつは、クリスマスにプレップスクールから、そして後に大学から西へ戻ってきたときのことです。シカゴより遠くへ行く人は、12月の夜6時になると、古い薄暗いユニオン駅に集まり、すでにクリスマスの浮かれ騒ぎに巻き込まれているシカゴの友人たちと一緒に、急いで別れを告げに行ったものです。ミス・ザッツから帰ってきた女の子たちの毛皮のコート、凍えた息のおしゃべり、古い知り合いを見つけると頭上で手を振り、招待の言葉を交わしたのを覚えています。「オードウェイズに行くのか、ハーシー家に行くのか、シュルツ家に行くのか」そして、手袋をはめた手で長い緑のチケットを握りしめた。そして最後に、ゲート脇の線路には、クリスマスのように陽気なシカゴ・ミルウォーキー・アンド・セントポール鉄道のからし色の車両が停車していた。(139)

このように9章では昔懐かしいシカゴのイメージを象徴する中西部の思い出とシカゴにつながる鉄道が描写される。鉄道は東海岸から遠くミネソタの土地につながる。その線路が故郷につながり、ニックが感じた孤立と断絶を克服する中西部の空気を暗示する。なにげない鉄道のすがたではあるが、ニックには馴染みのある「からし色の車両」が彼の人生に救いの手を差し伸べる。

ヴォルフガング・シベルブシュ『鉄道旅行の歴史』(1977)によれば、19世紀後半は、空間と時間の征服と支配に集中したが、その最も共通するコンセプトは、この時代の科学的社会論の中心であった「循環」だった[16]。その起源は明らかに生物生理学的なものであったが、近代的な交通のプロセスを反映したものであることも同様に重要であると指摘されている。「循環する」動きとは、『グレート・ギャツビー』のなかで、鉄道という近代的な交通機関に重ね合わせられてたしかに何か関係のあるように思えてくる。先に述べた若いギャツビーが、ルイヴィル市内を走る客車に乗車して、もしかするとであうかもしれないデイジーを思いおこす。かれを乗せた客車は、ルイヴィルの町から、どんどん遠ざかっていく。この場面は、ロマンティックな過去の回想として描かれる。この回想場面は、『グレート・ギャツビー』の終盤に登場するが、「循環」の概念を応用すれば、時間が前後したかたちで、鉄道の路線が、ロングアイランドのギャツビーに接続していると想像できるかもしれない。あのとき、ギャツビーを乗せたルイヴィルの電車は、中西部で途切れているわけではなく、あたかも、はるか遠くのニューヨークにまでつながっているかのように思える。つまり、ルイヴィルを走る鉄道が、はるか彼方の東海岸にまで連結している印象を残している。それは、鉄道のイメージが、この小説の背後にひそんでいるからと思われる。そのイメージとは、鉄道の循環する姿に連想できる。この小説には、循環と前進のイメージが印象にのこる。鉄道の循環する動きが、この小説の中心的なちからにつながっていると思われる。

シベルブシュは「循環とは結びつかぬものは、病的で、中世的で、破壊的で、脅迫的である」と述べる[17]。たとえば、トムは、倫理的な意識が薄いイメージしかないが、デイジーの夫トムとウィルソンの妻マートルの不倫関係が密になればそれだけ、お互いの男女が別の車両に乗ることが重要になる。もし、かれが、ロングアイランドの鉄道の「循環」を見過ごしていれば、不倫関係がスキャンダル化される可能性がある。トムは、単独で客車に乗るときは、世間一般の視線を意識する必要はないが、マートルと鉄道の車両に乗るときには、周りの眼を気にする注意深さがあるのは、うわさやスキャンダルが「循環」すると考えられる。2章ではかれは「イーストエッグの住人の目があるかもしれない」と言っていることからも、トムはその注意深い台詞

から、電車の「循環」には気が付いているようにみえる。

最終的には鉄道の循環とは、関係なく、ウィルソンの妻マートルが車の事故に巻き込まれる。不規則な自動車の暴走で、この二人の不倫の循環も終焉を迎える。一方、鉄道は時刻表どおりに循環する。電車は、路線を駅と駅を結び、最終的に広範囲に広がった。鉄道に乗ったニックは時刻表通り、ミネソタに帰ることができた。自動車もやがて、全国に広がる鉄道網のように、州と州をつなげるハイウェイが循環するようになる。車には交通規則が確立されて、1921 年の連邦道路維持法など道路の維持拡大が積極的に展開し、連邦補助によって整備される道路は、無料であることが明記された。車の動きも交通ルールの定着とともに、安全に循環するようになった。『グレート・ギャッビー』の 1910 年代から 20 年代において、車は不安定なモビリティであり、その行動範囲は限界があった。車とは「不注意な」運転者たちが、事故を起こすような破壊的な象徴でもある。自動車が安全な循環を維持するのには、しばらく時間がかかった。

本論文は、第２０回日本英文学会関東支部大会での研究発表「グレート・ギャツビーの鉄道旅行」に全面加筆を加えて、大幅に書き直したものである。査読委員の方々、司会の明治大学の山本洋平先生のコメント、に感謝申し上げます。

注

使用したテキストは、Fitzgerald, F. Scott Fitzgerald. *The Great Gatsby*. New York: Oxford University Press, 1998. 引用の英文括弧は、同書の頁である。日本語は拙訳による。

1　*Moving Modernism* では、「動き」「テクノロジー」の視点からモダニズム文学が考察される。Bradshaw,pp.1-3.
2　Takeuchi, pp. 198-214.
3　本小説の自動車がイメージ、象徴としてどのように操作されているのか、分析されている。Meara, pp.1-10. 丹羽、pp.105-136
4　Long Island
（https://slideplayer.com/slide/9137152/27/images/3/Long+Island%2C+New+York+West+Egg+East+Egg+New+York+City+Valley+of+Ashes.jpg）2022 年 10 月 22 日アクセス参照
5　New York
(https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/9/92/Queens_Borough%2C_New_York_City%2C_19101920%3B_the_borough_of_homes_and_industry%2C_a_descriptive_and_illustrated_book_setting_forth_its_wonderful_growth_and_development_in_commerce%2C_industry_and_homes_%2814778805361%29.jpg）
2022 年 10 月 22 日アクセス参照
6　Churchwell,　pp.103-106
7　Bilotto, pp.63-88、Parkinson,p.17
8　小池滋、 pp.164-202
9　原武史、pp.200-203
10 ブラウン、pp.252-253
11 Fisher,　p.155
12 ポール・ライダーによると、エリオット『荒地』（１９２２）のなかのタクシーの鼓動が、『グレート・ギャツビー』のなかで引用されていると関連性を強調される。
13 シベルブシュ　pp.220-221
14 シベルブシュ　pp.147-148
15 レオ・マークス pp.386-395
16 シベルブシュ　pp.242-245
17 シベルブシュ　p.243

参考文献

Bilotto, Gregory. *The Rise and Fall of Pennsylvania Station,* Charleston: Arcadia Publishing, 2021.
Bradshaw, David, Laura Marcus and Rebecca Roach. *Moving Modernisms,* Oxford: Oxford University Press, 2016.
Ｃｈｕｒｃｈｗｅｌｌ, Sarah. *Careless People,* New York：Penguin Book, 2015.
Fisher, Philip. *Hard Facts,* New York: Oxford University Press,1987.
Meara, Lauraleigh O', Medium of Exchange: the Blue Coupé Dialogue in *The Great Gatsby* Papers on Language and Literature; Edwardsville, Ill. 30, 1, Winter 1994.
Parkinson, Kathleen. *F. Scott Fitzgerald Penguin Critical Studies,* New York: Penguin Books, 1987.
Ryder, Paul. The Motorcar and Desire: a cultural and literary reconsideration of the motorcar in modernity, Southern Semiotic Review, vol.2 Western Sydney University 2013.
Yasuhiro, Takeuchi. Gatsby's Green Light as a Traffic Signal: F. Scott Fitzgerald's Motive Force *The F. Scott Fitzgerald Review* Vol. 14, No. 1, 2016.

ウォルフガング・シベルブシュ 『鉄道旅行の歴史』 加藤二郎訳 法政大学出版局、1982 年。
小池滋 『余はいかにして鉄道愛好者となりしか』 ウェッジ、2007 年。
ディー・ブラウン 『聞け、あの淋しい汽笛の音を』 草思社、1980 年。
丹羽隆昭 『クルマが語る人間模様』 開文堂出版、2007 年。
原武史 『鉄道ひとつばなし 2』 講談社、2007 年。
F. スコット・フィッツジェラルド 『グレート・ギャツビー』 小川高義訳 光文社、2009 年。
レオ・マークス 『楽園と機械文明』 研究社、1972 年。